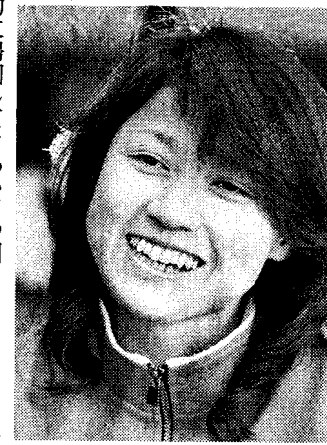


# 話の肖像画

1  
スマイル

《トリノ五輪で日本スケート陣は7大会ぶりにメダル獲得を逃す結果に終わったが、そんな中でも、意地を見せたのは、34歳のベテランだった。風邪で声をからしながらも、日本代表選手団の主将として、入村式や開会式など、セレモニーに「皆勤賞」。結果は3位に0秒05差の4位に終わったが、その表情は後悔の念をみじんも感じさせなかった》

——トリノ五輪から3カ月がたちました。帰国後はだいぶ忙しかったようですが、岡崎 そうですね。3月中



H18.6.1

スピードスケート選手 岡崎朋美さん

■岡崎朋美 1971年、北海道生まれ。スピードスケート短距離選手。釧路星園高校時代は無名も90年に富士急に入社後、急成長し94年リレハンメル五輪から4大会連続で五輪出場。98年長野五輪五百メートルで銅メダルを獲得。日本代表選手団の主将を務めた2006年トリノ五輪は日本女子最高の4位。さわやかな笑顔と闘志あふれる滑りで日本スケート界を牽引(けんいん)する。ワールドカップ(W杯)通算12勝。

## ぐらついた精神の「無」

事前記者会見から、開会式まで出席しましたね。  
岡崎 主将でなければ、セレモニーはほとんど出ていないと思います。開会式も、(自身初の五輪となった翌年)リレハンメル大会は出たけど、その後は出席してないし、今回も出ていなかったと思います。  
自分の体を大事にすることは当然考えた。だけど、主将を務めることを受諾したのは自分。日本で行われた結団式にも、海外での大会のために出席できなかったし、主将らしいことをしていなかったんですよ。現地では、できることばやろうと思いました。  
——五百メートルは3位の任慧(中国)と0.05秒差の4位。セレモニーを欠席していれば、体調ももう少し整ったかも……。  
岡崎 それを理由にしたくないですね。0.05秒は私自身の問題。2本目のスタート前の精神面が多少、ぐらついてたのだと思います。

——本目が終わり、控室で休んでいたら、私のところに誰かが1本目のタイム表を置いたんです。いつもタイム計算はしないのですが、「なんだ、この紙は？」と手に取ったら……。見なきゃ良かったものを、計算してしまった。そうしたら、精神的に「無」だったのが、ちょっと変な方向に行っている感じがして。  
——あの結果については、岡崎 すごく悔しかったです。ホントは2本目、もうちょっと速いはずなのに、最後のコーナーでバランスを崩しちゃって……。でも、それは受け止めないといけないこと。ベストを尽くしたという満足感はありません。

聞き手 橋本謙太郎

2  
スマイル

《酪農を営む両親と、北海道の大自然に囲まれて育った》  
——小学生のころから、あまり手のかからない子供だったと聞いています。  
岡崎 はい。北海道の実家は、いまは酪農ですが、昔は畑もやっていた。地域の人たちの共同経営でした。自分たちの都合だけでなく、いろいろな人の時間帯とか見ながら動いているのは、子供ながらに分かっていましたね。その分、あまり口うるさく言われなかったもので、私にとっては良かった。

## 5歳のとき、保育園のお遊戯会であいさつ



——スケートを始めた経緯は。  
岡崎 もともと陸上をやっていたのですが、小学校3年のとき、女の子が転校してきたのがきっかけです。その子がスケートをやっていたので、私も習えば、冬もずっと一緒にいられると思い、スポーツ少年団に入りました。練習後、保護者の方々がジュニアとかアイスクリムとかを差し入れてくれて。練習は苦しいけれど、その後がすごく楽しみです。シンギスカンパーティを開いてくれたり。  
リンクは天然。トラクターにタンクをつけて、木を後ろ

## 天然のリンクに育まれて

——ところが、釧路に行ってみると、虎の穴(こうけつ)だった。  
岡崎 そうなんですよ。親元から離れた気が強かった。これは絶好のチャンスだと、羽を伸ばせる感じでした。スケートを続けたいというより、スケートを軸にすれば、遠くに行けるというのであれば、続けよう。  
——ところが、釧路に行ってみると、虎の穴(こうけつ)だった。  
岡崎 そうなんですよ。親元から離れた気が強かった。これは絶好のチャンスだと、羽を伸ばせる感じでした。スケートを続けたいというより、スケートを軸にすれば、遠くに行けるというのであれば、続けよう。

聞き手 橋本謙太郎